

feel TEIKYO ft

あなたにつながる帝京大学 撮影・加瀬健太郎

会計学から、時代を超えて
様々な人生が見えてくる。

赤レンガのモダンな建物前に集う、帝京大学経済学部経営学科の学生たち。ここは、世界遺産登録をめざす群馬県の富岡製糸場。明治3年に日本初の官営模範工場として創設され、輸出産業の主力であった生糸の生産を行い、外貨獲得の要となった場所です。そんな歴史的な産業遺産と経営学、一体どんな関係があるのでしょうか。

実は、学生を率いる石原裕也教授は、富岡製糸場総合研究センターの今井幹夫所長をサポートするかたちで、工場の会計の歴史を研究している人物。過去の膨大な資料の中から、年度ごとの決算書を抜き出し、現在の簿記様式に置き換える作業を続けています。「作業は地道なのですが、百数十年前の日本人が海外諸国を相手に一生懸命戦っている様子が、数字からリアルに見えてくるのが面白い」と話します。また、官営模範工場という富岡製糸場の置かれた独特な立場を、帳簿から読み解くこともできるそう。二元々は工女の訓練所として、営利目的ではない状況でおおらかに運営されていたのですが、日本財政の行き詰まりから、財政指導者による、利益を上げるからこそ、みんなが真似したくなる模範として成立するのだ、という考え方が導入され、黒字化に力を入れるようになったのです。そんな運営方針の変化は、決算書の細かさや表記方法にも現れています。「その後、官営工場の多くは、政府の財政難の埋め合わせのため、民間企業に払い下げされることに。そのときの会計資料を研究することで、国による運営と民営化したときの差異が見えてきて、近年の民営化問題を考えるヒントにもつながるのです。」

この日、学生たちは、普段なかなか見られない、地方から出稼ぎに来た工女たちの宿舎や、若い工女を教育する敷地内にある学校などを巡りました。「創設当時、一等工女の賃金は月に1円75銭。実家に仕送りをする工女も多い中、受け取ったお金を宿舎内の売店で使い果たしてしまい、困って親元に借金のお願いをした手紙なども残っているんですよ」と今井所長。そんなお金にまつわるエピソードからも、学生たちにとって遠い存在だった明治時代の女性たちが、生き生きと身近に感じられるようになります。会計学の魅力は、そんな風に数字から人々の人生が浮かび上がってくる点です。明治時代も現代も、やっていることは結局あまり変わらないのかもしれない。私たちの生活のあちこちに、会計が生きています。



帝京大学 本部広報課
TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1



帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします
帝京大学のあれこれを充実のコンテンツで紹介する冊子「feel TEIKYO」を配布中。
冊子請求先 → post@med.teikyo-u.ac.jp (本部 広報課)
スペシャルサイト → www.feelteikyo.com